

十字路

十字路

工	磯	寺	江
藤	谷	沢	島
花	美	春	智
子	代	枝	絵
	江		

歌 集

十 字 路

徳島短歌連盟叢書第12篇

昭和43年7月20日発行

著 者 江 島 智 絵
寺 沢 春 枝
磯 谷 美 代 江
工 藤 花 子

発行所 徳島市徳島本町3丁目
坂本不二子方
徳 島 短 歌 連 盟

印刷所 徳島市西大工町4丁目
原田印刷出版株式会社

非 売 品

序

紫陽花の藍色の玉がうつくしい頃、私にとって最も親しい、江島智絵さん、寺沢春枝さん、磯谷美代江さん、工藤花子さん等が、合同歌集を出されることになった。

これまでの過程をみ守ってきて、いま嬉しさでいっぱいである。

同じ町に住んでいても、なか／＼会うことはないが、短歌にかかわっている故にこそ、時々出逢っても、いきなり話し合える幸わいをしみ／＼思う。

初夏の明るい陽ざし、並木を渡るさわやかな風、顔も声も生活も、それぞれに異なる四人のかもしれないあたたかな雰囲気はまさに「十字路」である。

森番のごとく静けき秋の日を誰にむきても同じ印を捺す

ガラスの扉硝子の窓とガラスの壁放たるる刻なく我は身構ふ

洗練された知性と感覚の中に息づいている、現代的抒情である。

江島 智絵

全

実験着の汚れかまはぬ青年に美しき確証を得さしめよ春

江島 智絵

令息と共に長いきびしさ、さびしさを経て実った確証は、一つの実験のみではなかったと思う。清純に真摯な江島さんの声が随所にきかれる。

「森番のごとく」「『ある寓話』から」は、潮音二十首詠入選作品である。

訪ねざる月日またたく間に過ぎて街角にふと邂逅を思ふ

寺沢 春枝

惜しみなく公孫樹はきんの葉を降らすこの墓原のすべての墓に

全

理窟なしに胸にしみ透る、あたたかさ、ゆたかさは寺沢さんのロマンの泉から汲めば汲むほどみず／＼しいのである。

木の皮に飢ゑしのぎつつ一群の猿は下北の冬を憎まず

全

「下北半島の猿」一連は、こまやかに鋭く、又愛ふかく、寺沢さんの人生観を覗く思いがする。

庭石の窪みに冬の陽が移り子のみが知れる場所に置く鍵

磯谷美代江

鍵を持つ母と子の心のつながりを、心憎いまでにうたっている。

火口湖につづく石原縹渺として白点となり人登りゆく

全

雄大な風景の中に知る新鮮な孤独感である。

五万噸の原油を積みし処女航路チーフオフィザーの任務重き子 磯谷美代江

外国航路に乗っておられる令息を詠んだ多くの歌は、いきいきとして作者の心の支えとなっていることがわかる。

MPに哀れみを乞ふ瞳を向けしその屈辱を玄海に捨つ 工藤 花子

キューバの危機去りたるニュースきく宵の柘榴は一粒づつを灯して 全

背骨のしっかりした物の見方、現代社会の問題意識を抒情詩の中で、如何に表現して行くかに賭けている歌が多い。オリムピックをうたった「差別なき祭典」一連も鋭くさわやかである。

吊るされて蹄鉄打たるる馬の瞳の伏せられて秋の壁画となれり 全

今年一月、潮音二十首詠入選作「韓国市日」は、異色で、風物を通して批判の声がかれるが、その中で最も詩的である。

昭和四十三年六月

坂 本 不二子

目次

ガラスの城

江島智絵

一

遼近

寺沢春枝

五

火口湖

磯谷美代江

一〇九

流木

工藤花子

一三三

序文 坂本不二子

あとがき 江島智絵

ガ
ラ
ス
の
城

江
島
智
絵

かつて歌集四季が出版されたとき、ある方から私のロジカルな面についてご批評をいただき、その後、別の方から私のリリカルな後背地についての文章をいただいたことがある。今回は、四季以後十年間の千余首から百八十首を抄出したが、これは寂しい業であった。これらの作品がかの文章における暗示のごとく、抒情に傾いて来たことに驚くとともにそれではないのだと思っている。「ガラスの城」を親しい人たちにおくる。

目次

森番のごとく	四
美しき確証	九
ゴッホ展	一二
「ある寓話」から	一四
多くを読みつつ	一六
土柱・大谷焼・木偶など	一九
冬の音	二五
沈めゐるもの	二七
そのまま朝に	三一
裏磐梯・北陸・小豆島・桜島	三四
冬の碑	四四
博物のうた	四六
五月の光に	四七
モラエス忌前後	五〇

森番のごとく

古代より未来に至る書を並べ書架さわやかに
秋となりたり

森番のごとく静けき秋の日を誰に対きても同
じ印を捺す

磨きたるタイルにうつる人かげの時に魚のご
とき秋なり

ガラス張りのビル深くすみて秋の陽の照り翳るにもさとくなりゐる

原色のシャツを好まぬ若者らひと夏を寄りて読みふかめ来し

嘗て図書室を愛したる青年も画家となり秋の個展のポスターをはる

一ところ私語をたかめる若者ら堪へゐる我のかなしみをみよ

同じことをきかれて過ぐる我の四季人を愛するやと問ふ人もあれ

谿よりの青さをたづさへ来し少女閲覧机に苔をならべる

潮騒を箱に蔵ひて凶鑑を繰る少女の貝はこわれやすかり

まだ誰も出て来ぬ職場におそ夏の白き陽のみが楚々と入りをり

蝶とんぼ昆虫ピンで刺す朝を少年は運ぶ野の
風の音

パンを売る驢馬の音楽ちかづけば読みゐる君
らも耳を澄まさむ

貝塚のことを調べて須臾に去るときのかがや
く眼も愛すべし

ブラインドを洩るる白き陽背中より遠ざかり
つつわが室の秋

九月の驟雨すぎゆく音はきこえぬにガラスの
裡まで雨足白し

何よりも仕事を愛する掃除婦に磨かれてタイ
ルの曇る朝はなし

ガラスの扉硝子の窓とガラスの壁放たるる刻
なく我は身構ふ

すでに人らの帰りし室に換気扇まはして明日
のはかなさを待つ

美しき確証

実験の過程ごとくフィルムに収めて父より新らしき青年期

雪の夜も実験室は灯されてガラス器に賭くる
青年期あり

実験着の汚れかまはぬ青年に美しき確証を得
さしめよ春

青年期を充たせて冬を瘦せてゆくきびしき学
問をえらばしめたり

若くして畢りし父の学問を究めつつきかむ雪
のつむ音

薬品の沸く音雪のつもる音かそかに青年は深
夜を一人

硝子窓淡青となる科学室に白衣の青年は夜明
けを知れり